

令和8年度研究推進計画

学 校 名 江田島市立大柿中学校

学校長名 脇 田 啓 治

1 研究主題、研究内容・方法等について

(1)研究主題 主体性を拓く「学びの変革」-自ら学び、自ら律する生徒の育成- (仮)

(2)主題設定の理由

現代社会は、予測困難で変化の激しいVUCAの時代を迎え、生徒たちには、確かな価値観を基盤に自ら進むべき道を切り拓く「主体性」が求められている。

こうした中、本校では、令和6年度から2年間、道徳教育推進拠点地域事業の指定を受け、自己の生き方を追求する児童生徒を育むことを目指し、小中9年間を見通した道徳教育を実施してきた。これまでの実践を通じ、道徳的価値への理解は深まりつつあるが、激動の時代を生き抜くために必要な自らの考えを基に判断し、よりよい人生を切り拓こうとする主体性を育むことが重要な焦点となってくる。

また、本校の学力調査・生徒質問紙（本校生徒取組チェック）の結果については、以下のとおりである。

1年生	本校	全国	目標値
国語	60.5%	63.0%	60.4%
社会	47.4%	55.9%	55.2%
数学	57.4%	57.0%	56.8%
理科	51.6%	57.6%	56.6%
英語	42.8%	51.9%	52.4%

2年生	本校	全国	目標値
国語	70.8%	70.2%	65.8%
社会	57.5%	52.6%	51.8%
数学	45.4%	50.5%	53.3%
理科	58.2%	50.5%	52.7%
英語	47.8%	51.0%	51.1%

質問項目	大柿中学校	
	7月	12月
自ら進んで自分の考えを発表する。	57.9%	59.4%
根拠をもとに、相手に分かりやすく考えを伝えている。	68.2%	65.2%
他者の考えを受け入れ、自分の考えを深めている。	84.2%	82.6%

本校の生徒の実態を学力調査および意識調査から概観すると、まず約半数の教科で全国平均や目標値を上回る成果が見られる。特に意識調査において「他者の考えを受け入れ、自分の考えを深めている。」という項目が8割を超えて高い数値を示している。これは、学級内での対話的な学習基盤が整ってきていることが伺える。また、「自ら進んで発表する」態度は経時的に向上しており、主体的に学ぼうとする意欲が見て取れる。

一方で、全国平均や目標値に届かない教科も散見される。意識調査では「根拠を基に分かりやすく伝える」力や「他者の考えによる深化」の数値に微減が見られ、対話の質を深め、確かな学力へと結びつける点に課題が残る。特に、学んだ価値を根拠をもって論理的に表現し、実生活における主体的な判断や行動へとつなげる力の育成が必要と考えられる。

そこで本研究では、研究主題の「主体性を拓く」姿を、生徒が自らの現状を把握して最適な「目標・課題設定」を行い、そのプロセスを深く「振り返り」ながら次の行動を修正していくサイクルが、日常生活の中で習慣化されていることと定義する。具体的には個別最適な「学習デザイン」により、生徒一人ひとりが自分に合った学習方法や目標を自ら決定できる場を保障する。さらに、失敗を許容し多様性を認め合う心理的安全性が保たれた集団を築き、自らの歩みを客観的に振り

返る時間を継続的に設定する。こうした「自己決定」と「改善」のプロセスを教科指導と生徒指導の両面からアプローチし、学校生活のあらゆる場面で習慣化させることで、自らの人生をたくましく切り拓く主体性を育んでいく。

各教科（5教科）で次のような授業づくりの工夫を行う。

国語	「比較」の観点と文型の固定化により、書く力からの基礎を確立し、苦手意識を低減させる。文章構成にはICTを活用し、他者参照や段階的な遂行を繰り返すことで、思考の深化を促す。生徒自らが表現を選択・修正する自己決定の場を保障し、個別最適化された学びを通して、論理的に書く主体性を育成する。
社会	ICTで多角的な資料を提示し、事象の関連性を深く考察させる。生徒が自ら資料を選択・分析する自己決定の場を設け、個別最適化された学びを展開する。他者参照を伴う交流の場で多角的な視点を取り入れ、思考したことの根拠をもとにまとめ直す活動を習慣化し、自ら社会の納得解を追求する主体性を育成する。
数学	数量関係の視覚化やICTを活用した図表の提示により、情報の整理を助ける個に応じた支援を行う。解放の選択や自分のペースでの学び直しといった自己決定の場を保障し、個別最適化された学びを展開する。試行錯誤を支える心理的安全性の中で、粘り強く自ら解を導き出す主体性を育成する。
理科	ICTによるシュミレーションや事例提示を活用し、考える視点を明確にすることで、概念理解の定着を図る。生徒の疑問に基づいた課題の設定という自己決定を重視し、試行錯誤を許容する個別最適化された実験を展開する。根拠に基づき、多角的に考察・表現する活動を通じ、事前事象を究明する主体性を育む。
英語	音声ソフト等ICTを活用し、個々の進度や課題に合わせたリスニング・スピーキング活動を行う。自分の考えを表現する際は、語彙や文型を自ら選択する自己決定を促し、個別最適化された言語活動を展開する。失敗を恐れず伝え合える心理的安全性を基盤に、目的や場面に応じて英語で発信する主体性を育成する。

（３）研究仮説

教科指導において、個々の特性に応じた「個別の学び（学びのUD：取り組み方の多様性など・ICTの活用）」と互いの考えを練り上げる「協働的な学び」を一体的に充実させ、生徒自身が学習方法や目標を自己決定できる場面を意図的に設定すれば、生徒は自律的に学習を調整し、主体性をもって課題に立ち向かうことができるであろう。

（４）本校で育成を目指す資質・能力

- Ⓐ 主体性
- Ⓑ レジリエンス
- Ｃ．協調性
- Ｄ．高い志

今年度も理由を明確に伝えようとするＡ．主体性の育成を重視する。さらに、困難な状況でも結果を恐れず挑戦し続けるＢ．レジリエンスを育むことで、自己決定の質を高め、失敗を糧に自律的に学びを調整する生徒の育成を推進する。

(5) 具体的な活動例（全てを行うのではなく、どれか1つでも意識してもらえればと思います）

①学習時間の柔軟な提供・設定

○単元内自由進度学習の導入

- ・授業はじめに「ミニ・レッスン（共通指導）を行い、残りの時間を「自分の弱点補強」か「発展課題」かを生徒が選択して進める時間とする。

○クリニック・タイムの設定

- ・教室の一角に教員と相談できる「クリニック・コーナー」を設置し、生徒が必要を感じたときに自ら助言を求めに行くスタイルを確立する。

②他者に聞くことができる機会の提供

○「ラーニング・コミュニティ」の形成

- ・「教える・教えられる」という固定的な関係だけでなく、互いの異なる視点を組み合わせて協働学習を行う。

③見通しと振り返りの設定

○「プランニング・シート」の共通化

- ・授業冒頭に今日のA（主体性）目標と「活用する学習リソース（教科書、ICT、友だち）」を宣言させる。

○「リプランニング」の賞賛

- ・計画通りにいかなかったが、次のように修正したというプロセスを成果として評価する。

④個に応じた学習課題・環境の整備

○多層的なリソースのプラットフォーム化

- ・Google Classroom等に「解説動画」「ヒントカード」「練習問題」を常設し、生徒が自分の理解度に合わせて「今必要なもの」を選択できる環境を整える。

○「ラーニング・ゾーン」の構築

- ・教室内に「一人で集中するゾーン（パーソナル・ゾーン）」「対話・相談するゾーン（グループ・ゾーン）」を明確に分け、その日の自分の状態や課題の性質に応じて、生徒自らが学習場所を選択できるようにする。

⑤個に応じた学習活動の設定

○表現の多様化と自己決定

- ・単元の終末課題において、レポート、ポスター、動画、実演など生徒自身が強みを生かせるアウトプット形式を選択させる。

《①～⑤の連動モデル（例）》

【1. 見通しと計画のフェーズ（③×①×④）】

単元の導入や授業の冒頭で、ゴールを共有し、生徒が自分の現在地を確認する。

- ・【③ 見通し】「今日はどの課題に挑むか」自己決定する。
- ・【① 時間の柔軟性】自分の理解度に合わせて、基礎か応用を取り扱うかタイムスケジュールを自分で立てる。
- ・【④ 環境整備】「パーソナル・ゾーン」「グループゾーン」を選択するなど自ら学習環境を整える。

【実践と方略選択のフェーズ（④×⑤×②）】

- ・【④ 個に応じた教材】自分に必要なリソースを自分で選択する。
- ・【⑤ 個に応じた活動】自分にあったアウトプット活動を行う。（例：一人で解く、端末で図解にまとめる、音読して暗記するなど）
- ・【② 他者への相談】ヘルプサインの提示や教室内で「ミニ先生」にヒントをもらう。

【振り返りと調整のフェーズ（③×B レジリエンス）】

- ・【③ 振り返り】「選択した教材は適切だったか。」「時間配分はどうだったか。」「躓いたときどう修正したか」を記述する。
- ・【B レジリエンス】計画通りにいかなかったときも「なぜ失敗したのか」を分析できたことを価値付け、次時の計画（リ・プライニング）へつなげる。

①～⑤の機能的な連動イメージ		
柱（手だて）	役割と連動のポイント	主な資質
①学習時間の柔軟性	自己決定した計画を実行するための時間的余白を作る。	A 主体性
②他者への相談	集団の力を活用する。（心理的安全性）	C 協調性
③見通し・振り返り	活動の起点と終点のスイッチを入れる。	A 主体性 B レジリエンス
④学習環境の整備 教材の提供	自分で選択する「思考の道具（リソース）」を多層的に準備する。	A 主体性
⑤学習活動の設定	得意な表現や学び方でゴールを目指す 「個別最適化」の実現	A 主体性

2 検証

（1）検証の指標

①生徒の学力の変容

- ・全国学力・学習状況調査、江田島市学力調査
- ・全国学力・学習状況調査、江田島市学力調査の各生徒の得点の推移
- ・全国学力・学習状況調査、江田島市学力調査、評価問題、授業記録、生徒の作品等における学力向上の成果及び課題の具体

②生徒の意識の変容

- ・生徒の意識調査・自己評価の結果

(2) 検証計画

時期	内容
4 月	全国学力・学習状況調査（第 3 学年）
6 月	広島県学習意識調査
7 月	生徒質問紙（全学年）
12 月	生徒質問紙（全学年）
1 月	江田島市学力調査（第 1 ・ 2 学年）
2 月	江田島市学力調査の結果の分析

3 校内研修計画（案）

時期	研究推進に係る内容の研修	指導・助言（予定）
9 月中～下旬	研究主任等に関わる学びの変革推進協議会	

※その他、各教科部会で年に 1 回研究授業を行う場合は、こちらに含まれます。